

## 苦難は青年の業を成すの階梯なり

講演	宮庄 哲夫〔みやしょう・てつお〕
講師紹介	同志社大学名誉教授

同志社が英学校として1875年11月29日、デヴィスと新島の教員2名と、学生8人の10人で始まったことは、同志社ではよく知られていることですが、それでは同志社の最初の卒業生は何名でどんな学生たちだったか、ご存知ですか。今日のお話は、そこから始まります。

さて、同志社の最初の卒業式は1879年6月12日、第一期の卒業生は15名でした。3年半前、8名の学生で開校された同志社の最初の卒業生が15名とは一体どういうことでしょうか。まずはその謎解きから始めましょう。

ここ京田辺キャンパスの中央にありますラーネッド記念図書館のラーネッドという名前は、最初の教員だったデヴィスと同様、アメリカから派遣されてきた宣教師で、同志社開校翌年の1876年4月からキリスト教に関する科目だけでなく、数学、物理学、天文学、ギリシャ語、ラテン語など、幅広い講義を担当して、同志社草創期の教育に大きな貢献をした先生の名前です。そのラーネッドが同志社の「三つの源流」と称したものがああります。それは、まずは新島襄、次いで新島とともにデヴィスやラーネッドなどを宣教師として日本に派遣し、教育面のみならず経済的にも大きなバックアップをしたアメリカン・ボードというアメリカの宣教団体、いわゆるミッションといわれる海外伝道の組織です。そして三番目に挙げられるのが、熊本バンドと呼ばれた学生のグループです。新島とアメリカン・ボード、そして熊本バンド、これが同志社を創った三つの源流と言われます。

同志社スピリット・ウィークという機会を与えられましたので、草創期の同志社の三つの源流から、新島と熊本バンドに関係するエピソードをお話しようと思います。キーワードは新島が遺言で遺した「偶儻不羈」という言葉で、それを同志社の歴史が語られる際に、ほとんど名前を挙げられることがない一人の学生を通して見ていきたいと思います。

## 熊本からの転校生

最初の卒業式に戻ります。1879年6月12日に卒業した同志社の第一期生15名は全員がこの熊本バンドと呼ばれた学生たちでした。

熊本バンドのバンド (band) とは、ある目的のために集めるとか団結させるという意味の英語で、19世紀のアメリカの大学などでグループの名称として使われていました。ですから、ある目的のために熊本で団結させられたグループという意味になります。このバンドを「班」と訳しているものもあるようですが、熊本の花岡山の説明板によりますと、それは次のようになります。

1871年に設立された熊本洋学校で、軍人出身のアメリカ人教師ジェーンズに感化された学生有志が、キリスト教によって人心の改革をはかろうと、1876年1月30日の日曜日、熊本の花岡山に登り、キリスト教信仰の誓約書を交わしました。これが「奉教趣意書」といわれる一種の宣言文ですが、キリスト教を信奉すると共に、キリスト教を通して日本の新しい社会のため貢献しようとする決意を表明し、35名が署名したものです。しかし、このことが知れ渡ることによって、誓約に参加した青年たちは家族からも迫害を受け、なかには自決を迫られたり、座敷牢に幽閉されたりした学生もあったと言われます。その結果、熊本洋学校はその年の9月に廃校になります。学生たちはジェーンズの斡旋で開校直後の同志社にあずけられることになり、30名ほどの若者が同志社に転校してきたと言われています。実は正確な人数は分からないというが、いくつか説があるようです。

それはともかく、8名でスタートした同志社もその翌年の春には入学生が増えて40名ほどになっていましたが、さらに30名ほどの熊本バンドの学生を受け入れることで、本格的な学校としての体を成すことになったわけですが、もちろんそれは数的な規模というだけでなく、教育的な意味において同志社の源流となったと言わなければなりません。

熊本洋学校でのジェーンズの教育は、これぞ洋学校と言うべき徹底した英語による授業でした。言わずもがなかもしれませんが、念のため、同志社英学校というのも、英語を教えるが学校ではなく、英語で教育をする学校ということで、その点では熊本洋学校と基本的には同じです。違うのは、同志社は小さな私立で、熊本洋学校は熊本藩が設立した、言わば官立の学校だったということです。その意味で、設備や教育方針などには差がありました。それが後で触れます熊本から同志社に転校してきた学生たちの大きな不満の要因の一つでした。

話を戻しますと、洋学校の教育は、最初の一年は通訳なしでジェーンズの英語による英語の実践教育でした。私も少しそれに似た経験があります。大学に入塾してドイツ語を学び始めたのですが、最初の時間からドイツ人の先生によるドイツ語だけの授業というのがありました。先生はただドイツ語を一方向的に話して帰って行くという、まったくチンプンカンプンのまま、数カ月が過ぎたことを覚えています。熊本洋学校では最初の一年は英語による英語の習得、そして二年目からは地理、歴史、数学、哲学、天文学や地質学、化学、作文や演説など多様な授業がありましたが、これらすべてジェーンズが一人で英語で教えていました。ですから授業について行けない学生はほとんど退学させられ、四年後に卒業できた一期生は45人中11人だけだったという厳しさでした。こうしたジェーンズの軍人らしい厳格な教育にあって、キリスト教について語ることはなかったのですが、最初の三年のいわば教養課程を終えて学生たちが英語を理解できるようになってから、ジェーンズはキリスト教に触れるようになり、ついには毎水曜日の夜、自宅で聖書を教えるようになったといわれます。それが学生たちの心を捉え、若き魂に熱い信仰を醸成したのでしょう。

写真は熊本にありますジェーンズ邸です（この講演後の質疑で、三木先生から熊本地震でこの建物が崩壊したことを知らされました）。今風に言えば一種の国内留学のようなものでしょうか。最近では同志社でも英語でなされる授業ができてきましたが、どうですか皆さん、なかなか大変だと思いますね。140年程前にそうした教育を受けた若者がいたということ、英語によるレベルの高い教育を身につけ、しかもキリスト教信仰に燃える学生たちがやってきたことで、草創期の同志社に大きな影響を与えることになった、それが熊本バンドです。

ところで熊本バンドという名称は、デヴィスやラーネッドなど同志社で教えていた宣教師たちが、熊本からの転校生を呼び習わしたものだと言われていますが、彼らを受け入れることは、スタートしたばかりの同志社英学校の教育レベルや、カリキュラムにとってはまったく想定外のことでした。そこで彼らのために特別なコースを作ることになります。それが現在の神学部へのルーツになる神学科と呼ぶべきキリスト教伝道者を養成するためのコースです。それは新島がそもそも目指していたものではありませんが、設立間もない同志社にはその準備も許可もありませんでした。英学校の「余科」とは、余りという漢字の「余」ですから、要するにその他のという意味の学科という急場しのぎの形を作って、彼らを受け入れたわけですが、そしてそこから3年後の1879年に第一期卒業生15名が出てきたということです。

## 最初の卒業式

次頁はその卒業式のプログラムですが、よく見ますと午前10時から昼休みを挟んで午後5時まで予定されています。長時間の卒業式には理由がありまして、卒業生がそれぞれ勉強してきたテーマについて20分程のスピーチをすることになっていました。中には英語でスピーチをした学生が二名います。

卒業式の最後に新島が有名な演説をしています。『同志社百年史』から少し引用します。

「新島の演説は卒業生たちに大きな感動を与え、彼らは後々までその感銘を語り伝えている。新島は自分が同志社を設立するに至った経過について語り、ラットランドの大会の決意表明にふれ、それに応えて片田舎の老農夫が帰りの汽車賃をも寄附したことや、閉会後に後を追うようにして、貧しい寡婦が二ドルの献金をなしたことなどを感涙のなかに語り、会衆も袂をしばって傾聴した」（上野直蔵編 同志社 1979年 110頁）。そして「新島は終りに「Go, go, go in peace. Be strong! Mysterious Hand guide you!」と力強く叫んで卒業生たちの前途を祝福した」（同 111頁）と書かれています。この英語の少し古い翻訳では「行け、行け、心安らかに行け、而して強かれ、神秘の御手、諸兄を導き給わん」となります（森中章光『殉国の教育者 新島襄先生の生涯』泰山房1942年）。

神秘の御手と訳されていますMysterious Handとは神秘としか言いようのない、不思議な見えざる神の手による導きguideがある、ということでしょうか。巣立っていく卒業生に向けて、志を高くもって、強い気持ちで努力するなら、そこに神の導きがある、というこれは新島の経験に基づく確信に満ちた送る言葉だったと言えます。

こうして卒業した熊本バンド出身の15名は、当初は新島と同志社英学校に不満や批判をもちつつも、次第に新島の教育への情熱と人間新島に魅せられ、5名が英学校と同志社女学校の教師となり、5名が牧師としてキリスト教の伝道者に、また同志社以外の学校の教師に3名と、それぞれこの時代の教育やキリスト教伝道を担う有能な働き人となりました。彼ら第一期卒業生15名のうち5名が後に同志社の総長（当時は社長）になっています。

## 秀才組の徳富と乱暴組の蔵原

ところで、今日のタイトルの「苦難は青年の業を成すの階梯なり」は、彼らと一緒に同志社に来た熊本バンドの一員ではありましたが、卒業した学生たちよりは年下の蔵原惟郭という学生に宛てた新島の手紙にある言葉です。ようやく今日の本題に入ってきました。花岡山の熊本バンドの説明板に書かれていました35名の中に蔵原惟郭という名前があります（次頁写真）。草創期の同志社の、そして熊本バンドからの転校生でありませぬけれども、ほとんど同志社で語られることはありません。しかし私は、結論を先取りしますと、彼は新島が最も愛した学生の一人であったし、いわゆる「偶儻不羈なる書生」の具体的なモデルだったのではないかと大胆な推測をしております。ここから蔵原惟郭についてお話ししようと思います。

つい一月半ほど前、4月14日の熊本地震で大きな被害がありました。そのひとつですが、大変由緒のある阿蘇神社の立派な社殿が崩落した様子が報道されていました。

実は、蔵原の生家は、現在は阿蘇市に含まれる阿蘇郡西町村というところで、代々庄屋を務めた家でした。この家は阿蘇神社の社家といって神職の家柄でして、名前にある惟郭の「惟」は阿蘇神社の代々の大宮司の名前に含まれる文字です。そうした家柄ですから惟郭は三男でしたが、次男の兄惟暁が阿蘇神社の神官になっておりました。ちなみに、ワイドショー的なぞき見のようですが、神官になった兄惟暁も弟の惟郭も北里柴三郎の二人の妹を妻にしております。北里柴三郎はご存知の方も多いと思いますが、蔵原と同じ阿蘇の出身で、熊本洋学校と同時期に作られた熊本医学校で学んで、後の北里研究所や北里大学を作った日本の医学、細菌学の父といわれる学者です。

比較的保守的な空気が強い九州、熊本で、なおかつ、こうした家柄にもかかわらず、惟郭の父親はかなり進歩的な考えを持っていたようで、ジェーンズの洋学校に息子惟郭を学ばせる

ことにします。1875（明治8）年8月彼は熊本洋学校に入学しますが、翌年洋学校は廃校になってしまいますので、最後の入学生の一入でした。同級生に徳富猪一郎、後の徳富蘇峰がいて、一緒に同志社に来ることになります。

こうして14歳の惟郭は熊本洋学校に学び、ジェーンズの感化でキリスト教に触れます。それから先にお話しした花岡山の「奉教趣意書」に署名して、そのおよそ二カ月後の1876年4月3日にジェーンズから洗礼を受けてクリスチャンになっています。そしてその年の9月熊本洋学校からの一団として同志社に転校してきます。当時、15歳の彼は熊本洋学校の5期生ですから、一年弱ほどしか洋学校での教育を経験していませんが、先に述べましたように、ジェーンズによる徹底的な英語による英語教育で、少なくとも英語の力はあったかと思われる。しかし他の科目の勉強はしていないまま、同志社に転校したわけですから、同じ熊本バンド出身とはいえ、先の卒業生が学んだ余科とは違って、英学校の普通科で勉強していました。2歳年下の徳富蘇峰も同じでしたが、実はこの二人はあまり仲が良くなかったと伝えられています。

蔵原の息子が蔵原惟人という人がいます。この人は戦前のプロレタリア文学運動の指導的理論家で、ロシア文学者、翻訳、評論等の執筆活動で有名な共産主義者でしたが、父惟郭についての対談がある雑誌に収録されています。それによりますと、

「そのころ徳富蘇峰なんか非常に秀才で、学生のあいだで秀才組の頭領だったが、父のほうは乱暴組の大将だったといえます。それで双方が対立していたということだね」（「父を語る—蔵原惟郭のこと」『現代と思想』6 青木書店 1971年）。

## 偶像不羈なる書生

熊本バンド出身でも若かった蔵原は、当時はあまり勉強が得意ではなかったようです。しかし、先の対談や他に書かれたものでも、新島はこの蔵原を大変かわいがっていたようです。それを読み取ることができるのが、蔵原が突然英学校をやめて古郷の阿蘇に帰る際に新島が与えた手紙です。

余ガ友蔵原君来リテ我校ニ遊学スル茲ニ数年其業殆ド終ラントスルニ当リ、不幸ニシテ病ニ罹リ本日ヲ期シ京地ヲ発シ將ニ家郷ニ帰ラントシ余ニ一言ヲ求ム、余不敏ナリト雖豈敢テ之ヲ辞スヘケン、余君ヲ知ル茲ニ久シ、君ハ真ニ慷慨男子、特ニ基督教ヲ奉スルノ信徒ニシテ、其志操ノ高尚ナル、目的ノ幽遠ナル余ニ於テ更ニ間然スル所ナシ、唯タ一言以テ呈セントスル所ハ他ナシ、君ノ性ヲ矯ムルニアリ、君ノ性タル過激ニシテ恰モ烈火噴水ノ如シ、君ニシテ之ニ加フルニ沈思熟慮ヲ以テセザレバ、他日事ヲ為スノ日ニ於テ或ハ大ニ誤ル所アラシカ、・・・（以下略）

明治十五年之春三月六日蔵原惟郭君ノ故郷ニ帰ルヲ送ル新島 襄

（「三月六日 蔵原惟郭」新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』3 同朋舎出版 1987年 218頁。以下③218）

その3行目に、「君ハ真ニ慷慨男子、特ニ基督教ヲ奉スルノ信徒ニシテ、其志操ノ高尚ナル、目的ノ幽遠ナル余ニ於テ更ニ間然スル所ナシ」とあります。

まさに不正や不義を憤って憂い嘆く気概のある男子にして、しかもキリスト教を信奉するものとして、その堅い志の優れて高いことや、志すところの奥深さには、まったくもって批判の余地もない学生ではあるけれど、一方で乱暴組の大将を彷彿とさせるような、「君ノ性タル過激ニシテ恰モ烈火噴水ノ如シ」、つまり性格が、あたかも燃えさがる炎、あるいは噴水のようにほとばしる激しい気性であることを、ぜひ改めるべきだと新島が諭しています。それは、新島とは15歳ほど歳の違う師弟の関係から紡ぎ出された愛情に満ちた指摘であり、前途ある若者の将来への期待、ということができるのではないのでしょうか。新島は続けます。

「大器晩成学ヲ脩ルル豈ニ今日ニ限ラン、鏝ヲ養ヒ而後再挙スベシ、再挙成ラヌハ三挙アルベシ・・・、君ヨ一時学業ノ成ラサルヲ以テ生涯ノ事業ヲ誤ル勿レ」と。

まさにこれこそ「偶像不羈なる書生」への想いということができるのではないかと思います。

ここで、最初にキーワードと言いました「偶像不羈」について見ておきます。

写真①は作家の司馬遼太郎さんが同志社で講演をした際に書かれた偶像不羈の書です。

司馬さんが著書の『この国のかたち』というシリーズ第一書（17土佐の場合）で、この言葉について次のように説明しています。

「『偶像不羈』という漢語は、まことに異様な字面が四個もならんでなじみにくい。しかし江戸期の知識人のあいだでは、ごくふつうのことばだった。ある種の独創家、独志の人、あるいは独立性のつよい奇骨といった人格をさす。・・・もともと、漢字にはときに同語反対義があって、個はスグレルという意味と、正反対のオロカという意味とがある。偶像不羈の場合、世渡りからみればおろかともいえる」。

ここには偶像不羈の意味と、決して世渡り上手ではないが、志をもってそれを貫いていくという意味合いがあることが紹介されています。偶像不羈が、江戸時代の知識人にはごく普通の言葉だったというのはこの本で初めて知りましたが、この言葉が新島の遺言に遺されたことについて次に紹介します。

新島の遺言は1890年1月21日、亡くなる2日前に徳富蘇峰が筆記をしたものでありますが、新島は同志社の将来について、キリスト教による徳育や学芸の進歩、真正の自由を愛し、それによって国家につくすことができる人物の養成とともに、この「偶像不羈なる書生を匡束」しないことを遺言として遺しました。

## 新島、阿蘇に行く

さて、新島が蔵原を大いに気にかけていたことを示す資料を幾つか挙げてみます。最初は、1880（明治13）年10月から12月にかけて岡山、四国の今治、そこには第一回の卒業生で岡山に派遣された金森（かなもり）通倫（みちとも）、今治に派遣された横井時雄が伝道をしているのですが、彼らを励ますために訪問し、さらに九州の博多、熊本などを奥さんの八重さんと一緒に旅行したときの簡単なメモです。それによりますと、熊本から阿蘇山を越えて現在の阿蘇市に行くのですが、実は先の熊本地震で大きく崩壊した阿蘇大橋というのがありました。もちろん当時はその橋はありませんが、阿蘇谷と呼ばれるその辺りを通って阿蘇山を越えています。11月13日のメモに次のようにあります（⑤111）。

「市原ノ家ヲ尋ネ、宮川ノ家ニテ馳走ニ預ル。正午ニ該地ヲ発シ西町ニ至ル。兼テ約アルニヨリ蔵原氏ノ家ニテ昼食ス、時午後二時ヲ過ギタリ。阿ソ山四里ヲ越クルニ八時刻ノ遅キト風ノ烈キニヨリ、遂ニ蔵原氏ノ家ニ宿ス

翌十四日ハ安息日ナルヲ以、又蔵原氏ノ家ニ宿ス・・・

十五日

惟示〔コレトキ、長男〕氏、我等ヲ阿ソノ頂上近辺ニ送り来ル

別レノ歌アリ、別レノ文アリ」（⑤112〔 〕内は講演者注）

市原も宮川も最初の卒業生の熊本バンド出身です。熊本から阿蘇をわざわざ訪れるのは、熊本バンドの何名かの学生の出身地だからですが、注目すべきは、「兼テ約アルニヨリ蔵原氏ノ家ニテ」ということです。新島は、優秀な卒業生の実家を訪れるだけではなく、乱暴組の大将といわれる、敢えて今風に言えば、そのときに学中の問題児の家を訪問することを、前もって約束していた、ということです。いと違って交通の便がない当時、人力車と徒歩で熊本から阿蘇の山を越えて訪問するわけですが、それを蔵原に約束していた、ということです。

ところが訪ねて話が弾んだのでしょうか、山を越えて熊本に戻るには時間的に遅くなったということで、蔵原の家に泊る訳です。ところが、翌日は安息日だからといってもう一泊します。大阪弁で言うと「厚かましい」この神経分かりますか。

ここには新島のある意味、偶像不羈さが顕れているとも言えますが、これぞ新島がクリスチャンとして育ったニューイングランドのピューリタニズムの真骨頂です。つまり、安息日、日曜日のことですが、文字通り神の前に安息する日として一切の労働をしない、掃除も洗濯もしない、したがって旅行などもつてのほか、という安息日厳守の精神です。

実はこれには先例があります。新島がアメリカで勉強をしていた時、岩倉使節団がやってきて、その通訳として働きました。さらにヨーロッパの視察団にも随行していくのですが、その時、パリからジュネーブへの一行の移動の際に、曜日を思い違ひして安息日になることが分かって、新島は使節団から別れ、一人でフランスの田舎町に宿泊して、その町の教会の礼拝に出席した、というエピソードがあります。使節団として一緒に旅行している時でも安息日厳守を守る新島ですから、プライベートな旅となればそれはありでしょうが、ただ、旅館に泊まる訳ではないので、それを考えると信念の強さというのでしょうか、なかなか大変なことです。おそらく新島はその理由を蔵原の実家に説明して、もう一泊させて欲しいと頼んだのだろうと想像できますが、あえてそれを可能にした蔵原と新島との師弟の関係にも私は注目したいと思います。また翌日、蔵原の兄が新島を阿蘇山の頂上近くまで送って行ったとありましたが、そこで「別レノ歌アリ、別レノ文アリ」と書かれています。具体的にどういうことか、別れる際に歌（例えば讃美歌）を歌ったのか、あるいは和歌が漢詩でも引用したのか、別れの文とは何か、具体的に書かれていませんから分かりませんけれども、これまた他には例のない記述ですから、蔵原の家族との別れに何か特別な感慨があったのではないかと思います。この旅行では、卒業生やその家族など、多くの人たちに新島は会っているのですが、こういうメモは他にはまったく残されていません。

## 愛兒よ、忍ぶべし、忍ぶべし

蔵原に関してもう一つ資料を見たいと思います。

新島は1884年4月からほぼ1年8カ月に及ぶ欧米旅行に出かけますが、新島の2度目のアメリカ滞在に重なるように、先に同志社を中退した蔵原はアメリカ留学を志して新島より半年ほど先にアメリカに来ています。父親から自分の分として土地を分けてもらい、それを売って250ドル程を持ってアメリカに渡ったそうです。その程度のお金はすぐに無くなってしまいますから、いろいろなアルバイトや時に辛い労働で生活費を稼ぎながら、学びの機会を得るべく大変な苦勞をしています。この時期、新島は蔵原のために、留学先を斡旋したり、長年自分が愛用した洋服を与えるなど困窮する蔵原の身を案じて激励の手紙を9通も書いています。その一部を紹介します。

「労働は人生の良薬なり。苦難は青年の業を成すの階梯なり。小弟昔時〔渡米の船中で〕労働せし事一年余、また人の糞汁までも洗いし事あり。これらの事は今日にとり小弟を益する

殊に基だし。愛兄よ忍ぶべし、忍ぶべし。疲労はよく兄をして眠らしむべし」（同志社編『新島襄の手紙』岩波書店 198～199頁）。

新島自身の「人の糞汁まで洗った」という経験、それについても資料に入れておきました。少なくとも当時の武士階級ではあり得ないことです。自分のものですら洗うようなことは普通はしません。ですから次のa、b、c、のようなことになる訳ですが、

a、元治二年正月元日なり \*（バトナム、サイゴンにて）

たらちねは如何有けんけさの春

「古郷のけさは如何なる色ならん つらき勤の春も知らまじ

元日に衣そそくは如何なるぞ 去年（コソ）の旧あか洗抜とて」（⑤58）

b、Wed. 17th day, May (⑤63)

今晚四時より六時迄雨降る。雨水を取り我衣を洗へり、且船主の下衣、襪、枕覆等を洗へり。

c、元治二年七月二十四日 (⑤78)

吾波士頓に上陸し、所々見物し、魯敏孫クルソーの漂流記を買得たり。船頭吾に船番の役目を言付、日日船内の掃除をなさしめり。日々の働にて、夜分寐間に入れば早速眠り、朝目覚むれハ総身いたみ、自由に我身を動かす事能わず。辛苦之あまり

かく☒と兼て覚悟はせしなれどかく☒☒とかくとハ思ハじ

c、にある「かく☒と兼て覚悟はせしなれどかく☒☒とかくとハ思ハじ」という歌に込められているように、覚悟はしていたけれど、ここまでとは、とその苦難を正直に告白しています。

しかしながら、そうした苦勞をしてでも得るべきものはあるという確信を新島は蔵原に諭しています。「愛兄よ忍ぶべし、忍ぶべし。疲労はよく兄をして眠らしむべし」。特に、最後の、疲労することでよく眠れる、というところは、c、「日々の働にて、夜分寐間に入れば早速眠り」とあるように、辛い労働も考えようによっては、良い睡眠をもたらすとさえ、励ましています。新島自身はある意味ハーディーさんというスポンサーに恵まれたことで、外国で働きながら勉強する苦勞そのものは経験していませんが、脱国からそこに至る迄の苦難を通して、「苦難は青年の業を成すの階梯なり」と蔵原を激励した訳です。先に言いましたように、蔵原は今風に言えばバイトをしながら勉強を続けています。皆さんにも少しは共有できる経験だろうと思いますが、140年前の外国でのそうした経験ですから、たぶんそれはもっと大変なことだったのではないのでしょうか。

最後の資料ですが、これもアメリカでのエピソードです（「1885年10月9日の書簡」③363～364）。

・ ・ ・ 恐くハ君二適せざるべし、生之身体ハ君より少し大なり、全く御不用に属するも計られず、去れ共部屋之内にて着するならば苦しからざるべしと存候御呈送申候、ズボン大ならば仕立屋に托し之を縮むべし、其後・ ・ ・

この手紙で新島は、サイズが合わないかも知れないけれども、自分の背広を蔵原に譲ると書き送っています。その書面にある「とせ程着て恥ぢりし古衣 送る我身のこゝろばせ知れ」という歌には、「もう10年余り着た古着を与えるというのは、恥ずかしいことではあるが、いろいろ辛い状況のなかで勉強をしている蔵原に、外出用にはならなくても、普段着として部屋で着るのに使えるだろうからと、あえて古着を送る気持ちを察して、頑張してほしい」と、自分の苦勞に重ね合わせるができるような蔵原の苦難への特別な想いが込められているような気がします。

私も新島が遺言に遺した「傀儡不羈」の学生は、イメージとしては熊本バンドの学生たちがあったように思います。それが資料に入れました同志社のホームページから入れる「新島遺品庫」新島遺品庫資料の公開「新島襄ショートストーリー45『傀儡不羈』」です。

「新島襄が嫌うタイプの学生は芯のない「軟骨漢」であった。彼は言う。

「わが校の門をくぐりたる者は、政治家になるもよし、宗教家になるもよし、実業家になるもよし、教育家になるもよし、文学者になるもよし。かつ少々角あるも可。奇骨あるも可。ただかの優柔不断にして安逸をむさぼり、いやしくも姑息の計をなすがごとき軟骨漢には決してならぬこと。これ予の切に望み、ひとえに願うところなり」と。

逆に好ましいのは「傀儡不羈（てきとうふき）」の学生である。常軌では律しがたいほど独立心と才能あふれる青年である。新島はこの言葉を遺言に残した。同志社は今後とも、そうした学生を型にはめたり、圧迫したりしないで、本性にしたがって導き、将来の「天下の人物」に仕立ててほしい、と。「熊本バンド」は揃って「傀儡不羈（てきとうふき）」であったが、新島は決して彼らを抑圧しなかった。自身が国禁を犯して密出国した「傀儡不羈（てきとうふき）」だったからであろう。

でも、全体として熊本バンドの学生がそのイメージだったとしても、遺言で具体的なモデルとして新島の脳裏にあったのは、私は蔵原ではなかったかと推測するのです。と申しますのは、新島が遺言を遺した1890年1月には、蔵原はまだ留学中でした。蔵原が帰国したのは翌1891年12月ですから、その後の蔵原の日本での活躍は知るよしもないことですが、遺言を徳富蘇峰に筆記させている時、熊本バンドの優秀組の徳富と、乱暴組の大将ではあったが、いまアメリカで苦勞しながら勉強している蔵原の姿は、15歳で同志社に転校してきて、その志を苦難のなかで貫徹しようとしている愛すべき同志社の学生のモデルとして新島は見ていたのではないのでしょうか。私の勝手な想像かも知れませんが、蔵原に関する資料を改めて見ると、そう思えてなりません。

その後の蔵原は、新島の斡旋でバンゴウ神学校に入学、新島が学んだアンドーヴァー、そしてオーバンの神学校を経てニューヨーク大学大学院でPh.D.の学位を得た。さらに英国エディンバラ大学大学院で哲学や社会学を研究し、1891年請われて熊本英学校の校長になるため帰国。その後政治に関心をもち、衆議院議員となって普通選挙運動や労働運動などで活躍。1949年（昭和24年）1月8日87歳で永眠した蔵原の枕元には、新島からの手紙が置かれていた、といわれる。

まさに「苦難は青年の業をなす階梯」のとおり、乱暴組の大将と言われて同志社を中途退学した蔵原は、アメリカでの苦學の末、当時の日本人としては稀な博士号を取得して、さらに英国でも学んで帰国し、教育者のみならず政治家としても活躍するという波瀾万丈の生涯を送りました。その最も苦難の時期に新島の熱い祈りと励ましがあったことは、彼が枕元に持ってこさせた新島の手紙で示されているように思います。

「苦勞は買ってでも」という言い方があります。なかなか今日では理解されがたいことで、何もわざわざ苦勞しなくても、ということになりますが、新島は自分自身の経験を踏まえて、苦難がもつ積極的な意味を語っているのだと思います。そして志をもってその苦難に立ち向かう時に、そこに必ずや神の見えざる導きがあるという信仰的な確信が新島の心の内にあった、ということ。志のある苦勞は必ず報われる、それを同じキリスト教信仰をもって苦學している蔵原に、「愛兄よ忍ぶべし、忍ぶべし」と訴えていたのではないのでしょうか。

同志社のスピリットを改めて考えるというこの企画に、草創期の同志社が期待した学生像としての「傀儡不羈なる書生」というのは、具体的にはこういうことではなかったのか、というイメージの一端をお話しました。せっかく同志社大学に学ばれたのですから、どうぞこうした同志社のユニークさを味わっていただきたいと思います。

2016年6月1日 同志社スピリット・ウィーク春学期  
京田辺校地「講演」記録

※図の表示はホームページでは省略します。